

ピエール＝ジャケス・エリアス研究の現状について (1)

梁 川 英 俊

1. ピエール・ジャケス・エリアスについて

ピエール＝ジャケス・エリアス Pierre-Jakez Hélias、本名ピエール・エリアスは、詩や演劇、小説、コラムなど多方面に活躍した20世紀ブルターニュを代表する作家である。以下、簡単にその生涯を追おう。

1914年、ブルターニュのプルドゥルジックに生まれたエリアスは、幼年期をブルトン語¹のみで過ごし、小学校に入学するまでフランス語を知らなかった。その後も学校ではフランス語、家ではブルトン語という言語的二重生活を余儀なくされる。学業に優れ、カンペールのリセを卒業後、レンヌのリセの高等師範学校受験準備クラスに入学。読書三昧の生活を経て、自らも詩作を始める。教員としてサン・ブリューやレンヌに赴任。第二次大戦中はレジスタンスの仕事に従事し、終戦の年には国民解放運動（M.L.N.）の週刊紙『ヴァン・ドゥエスト』 *Vent d'Ouest* の主筆となる。

大戦後はラジオ・キメルフ Radio Quimerc'h のブルトン語ラジオ放送を任され、週に一話、笑劇やコントを執筆。相方のピエール・トレボス Pierre Trepos とともにジャケス・クロヘンとグウィルー・ヴィーアンという伝説的

1 ブルターニュで話されるケルト語、すなわちフランス語表記 *breton*、原語表記 *brezhoneg* には、日本語でブルトン語、ブレイス語、ブルターニュ語など幾つかの呼び名がある。近年は原語呼称の「ブレイス語」も多用されているが、筆者は言語学関係の論文でない限り、従来の「ブルトン語」の方がいろいろな意味で便利だと考えている。たとえば「ブルトン人」という呼称との整合性を考えれば、ブレイス語よりはブルトン語の方が読む側も混乱が少ないだろう。日本語を *Japanese* と呼ぶ英語話者に対して、原語呼称の *Nihongo* に変更すべきだと主張する人がほとんど見当たらない以上、なお知名度の低いブルトン語のようなマイナー言語の呼び方を、原語呼称にもとづいて変更しようとするのは、利益よりむしろ不利益の方が多いのではないだろうか。

な名コンビを演じる。番組は大きな評判を呼び、エリアスはブルターニュのブルトン語圏で一躍その名を知られることとなった。1946年10月、カンペールのエコール・ノルマルの教員に任命された彼は、以後1975年に退職するまで30年間そこに勤務。非宗教的教員組織の文学雑誌『アル・ファルス』*Ar Falz*に寄稿する一方、友人とともにカンペールの「コルヌアイユ祭」を創設し、野外演劇のための台本を書く。活発な演劇活動のかたわら、ブルターニュの民話や伝説に関する書物を執筆。詩集をはじめブルトン語とフランス語で多くの著作を物す一方、テレビ番組の制作や新聞のコラムの執筆など地域のマスメディアでも活躍した。

1975年、エコール・ノルマルを退職した彼は、プロンPlon社の「人間の土地」*Terre Humaine*叢書の監修者で民族学者のジャン・マロリー Jean Malaurie の勧めで、同叢書より『誇り高き馬』*Le Cheval d'orgueil*を出版。同書は総売上200万部という驚異的なベストセラーとなり、61歳の著者の名はフランス中に知られることとなった。

最晩年はフランス語の小説という新しいジャンルにも挑み、生誕80年に当たる1994年にはブルターニュ中から多くの祝福と賛辞が寄せられたが、翌1995年に81歳で死去した。

2. 研究状況について

上述の通り、1975年に空前の大ベストセラーとなった『誇り高き馬』によって、ピエール＝ジャケス・エリアスは一躍フランスのメディアからブルターニュを代表する知識人として脚光を浴びることになった。しかし華やかだったその晩年のイメージとは裏腹に、その作家としての評価は今日なお定まっているとは言い難い。

本稿の目的は、このエリアスの研究と評価の現状を、これまで出版された研究書や雑誌の特集号の読解を通して、分析および調査することにある。

もちろんこれまでこの作家に関して書かれたものは、書評や単独の雑誌の

記事等も含めると文字通り膨大であり、ここでそのすべてを取り上げることはできない。本稿が論評の対象とする文献は、書物全体がエリアスをテーマとしたもの、また一冊の書物中ある程度まとまった言及がこの作家に対してなされているものに限った。また大学の博士論文等、日本で容易に入手することができないものについては割愛することにした。こうした基準から選ばれた文献は以下の通りである。なお今回論評の対象になるのは 1)～6) である。

- 1) Xavier Grall, *Le cheval couché*, Hachette, 1977
- 2) *Le Cahier Art-Mène*, n° 4 « Pierre Jakez Hélias », 1990
- 3) *Brud Nevez*, n° 172, Emgleo Breiz, 1994.
- 4) Anne-Denes Martin, *Itinéraire poétique en Bretagne: De Tristan Corbière à Xavier Grall*, L'Harmattan, 1995.
- 5) Charlez ar Gall, Jean-René Le Quéau (et alia). *Per-Jakez Hélias, Skol Vreizh*, n° 36, 1997.
- 6) Pascal Rannou. *Inventaire d'un héritage. Essai sur l'œuvre littéraire de Pierre-Jakez Hélias*, Le Relecq-Kerhuon, An Here, 1997.
- 7) Thierry Glon. *Pierre Jakez Hélias et la Bretagne perdue*, Presses Universitaires de Rennes, 1998.
- 8) Ronan Calvez, *La Radio en langue bretonne: Roparz Hemon et Pierre-Jakez Hélias : deux rêves de la Bretagne*, Presses universitaires de Rennes, 2000.
- 9) Francis Favereau (dir.). *Pierre-Jakez Hélias, Bigouden universel*. Actes des rencontres internationales de Rennes, Presses Universitaires de Rennes, 2001.
- 10) Jean-Luc Le Cam (éd.). *Hélias et les siens. Helias hag e dud*. Actes du colloque de Quimper, Brest, Centre de Recherche Bretonne et Celtique, 2001.
- 11) Mannaig Thomas, *Pierre-Jakez Hélias et Le Cheval d'orgueil. Le regard d'un enfant, l'œil d'un peintre*, Brest, Emgleo Breiz, 2010.
- 12) *Bretons*, n° 57, août-septembre 2010, Ouest-France.

3. 本 論

1. Xavier Grall, *Le cheval couché*, Hachette, 1977

『誇り高き馬』の登場の2年後に出版された詩人グザヴィエ・グラールの名高いエリアス批判の書。一般的には、本書の登場を契機として、両者の間でメディアを巻き込んだ論争が展開されたということになっているが、実際には真の意味での「論争」は一度も行われていない。

なお本書『横倒しにされた馬』については、後日稿を改めて詳細に論じる予定なので、ここでは他の論考の論評を理解するための予備知識として必要な、最低限の情報を提示するにとどめる。

著者のグラールは1960年 - 70年代のブルターニュ運動のさなかに活躍したジャーナリスト、詩人、コラムニスト、小説家。韻文はもちろん詩的散文を駆使したその独特な著作は、「フランス語によるブルターニュ文学」というジャンルに分類されるものだが、いわゆる「フランス文学」という視点から見ればマイナーな存在だろう。しかしブルターニュにおける知名度はけっして低くはなく、いまなお一部でカルト的な人気を誇る作家である。

グラールは1930年にブルターニュのフィニステール県ランディヴィジオの比較的裕福な家庭に生まれ、1981年にカンペルレで死去した。この履歴だけで判断すれば、エリアスと同様に生涯をブルターニュで過ごした立派なブルトン人作家に見えるかもしれない。しかしブルトン語を知らず、フランスの厳格なカトリック教育を受け、パリのジャーナリスト養成所を経て『カトリック生活』*La Vie catholique*や左翼系カトリック雑誌『テモワーニュ・クレティアン』*Témoigne Chrétien*の編集に携わった経歴は、モリアックやベルナノスを論じたその著作を紐解くまでもなく、むしろ完全なフランス人のそれである。

しかしアルジェリア戦争に従軍後、彼はフランス国家への評価を一変させる。1973年にはパリからボン＝タヴェンに移住。ブルターニュの過去に自らの反ジャコバン主義的立場を重ね合わせる<ブルトン人作家>として新たな

使命に目覚める。同時代のブルターニュ運動にも積極的に関与し、幾つかの雑誌の創刊にも参加。1969年、テロリスト組織「ブルターニュ自由戦線」(FLB)のメンバーの逮捕に際しては、拘留者の支援組織を立ち上げにも加わる。にもかかわらず、つねに政治活動からは距離を置き、いかなる党派にも属さず、自らの詩的ブルターニュ観を保持し、「ブルターニュは神秘的で詩的な発明にほかならない²」とする独自の立場を崩さなかった。肺気腫の持病をもち、81年に妻と三人の娘を残して51歳の若さで死去した。

いささか前置きが長くなったが、『横倒しにされた馬』の内容は、その背景として著者の個人史を参照せずに理解することは難しいだろう。

この書物が出版されたのは1977年。出版元は名門アシェット書店である。帯には「誇り高き馬への返答」とあり、まるで最初から売れることを予期したかのように文庫本での登場であった。しかしその鳴り物入りの体裁にもかかわらず、全6章からなるこの書物のうち、まとまったエリアス批判はわずかに第2章と第3章のみである。まずはその各章を追いながら、グラールの批判を辿ることにしよう。

「旧人ジャケス」*Jakez l'Ancien*という副題をもつ第2章は、そのタイトル通りエリアスの時代遅れぶりが批判の対象となるのかと思いきや、もっぱら『誇り高き馬』の成功の理由ばかりが問われる。著者は言う。エリアスは何十年も前から同様の話を書いてきたのに、全国的にはほとんど評価を受けなかったのだから、本来人気のない作家なのであり、その著書が売れた理由がもしあるとすれば、それは作者や書物以外のところに求めなければならないのである。こうしてグラールはその理由を、1970年代からフランス全体を覆うレトロ・ブームに求める。人はしばらく前から田園やピトレスクな風景やルーツといった土臭さを渴望していた。この書物はその要求にぴたりと嵌ったというわけである。つまり話題となる地域がアキテーヌだろうとヴァンデだろうと、彼らにとってはどうでもよかったのであり、それがブルターニュだっ

2 Xavier Grall, « La Bretagne est une invention mystique », *Les Nouvelles Littéraires*, 26 mars 1976, n°2620, pp.18-19.

たのは単なる偶然にすぎないのである。

著者の批判の要点は、『誇り高き馬』がこうした風潮のなかで、「誇り高い」どころか、フランス国民の浅薄な欲望の玩弄物、わけてもパリのブルジョワの愛玩物になり下がってしまったということにある。この論理で行けば、当然エリアスはブルターニュを彼らに売り渡した張本人であり裏切り者である。実際、著者はこの作家がアグレジェでギリシャ語やラテン語を教える教師であることを強調し、彼に自らの故郷からその文化を奪った責任の一端を負わせるのである。

ピエール＝ジャクス・エリアスのブルターニュにはいかなる未来もない。彼は墓のような存在だ。「旧人ジャクス」はこのように印象的ではあるが一方的なフレーズを随所に散りばめながら、「いまこそ旧人ジャクスの『新約聖書』を紐解くときだ³」という文を最後に次章に移る。

「呻きつつ、また泣きつつ」Gémissant et pleurantと題された第3章は、「新約聖書」と題された『誇り高き馬』の最終章が、実はブルターニュの死亡宣告以外の何ものでもないという著者の断定から始まる。そこでエリアスはすべてが消滅に向かっていることを確認するが、それに対処する方策はまったく示さない。彼はただ嘆くだけで、破滅の進行を抑えるためには何ひとつしようとしないのである。フランス語は教えるがブルトン語は教えないこの人は、ブルターニュが歴史的・文化的に明らかにナショナルな一個の実体であるという事実にも価値を置かない。彼はジャコバン主義に骨絡みで、昼間は都会で良きフランス語教師として働き、太陽が沈んでからようやくブルトン人になるのだ。そしてそのブルトン人は、あれほど尊敬するアラン・ルゴフの種族を延命させるために、指一本動かさないのである。

その代わりに彼が夢中になるのは「フォークロア」である。そもそも『誇り高き馬』に描かれたブルターニュは、この作家がその実行委員会のメンバーであるカンペールのコルヌアイユ祭と同様、元来がフォークロア的なのだ。フォークロアは『『先祖のものであった農民の魂と心』を売春婦のように売り

3 Xavier Grall, *Le cheval couché*, Hachette, 1977, p.72.

物にすること⁴」以外の何ものでもない。この点を強調するために、著者はヴィシー政権の苦い思い出に訴えかけることも辞さない。「folklor Folklo、コラボcollabo、同じ韻だ⁵」。そう、エリアスのブルターニュは現在のブルターニュといささかの関連もない。「私は私の国の過去を拒絶しはしないが、現在の精神によって照らし出されていなければ、それは何ものでもないのだ⁶」。

ここでグラールの批判の個々の論点に深入りすることはすまい。ただひとつだけ、次のことを指摘するにとどめよう。それはこの両者の対立が実は補完的であり、どちらかに軍配を挙げられる性質のものではないということだ。エリアスが賞賛した祖父アラン・ルゴフは、成熟の仕方を教えてくれる人だった。一方グラールは、青年期にジェームズ・ディーンに熱中したように、永遠の青年に憧れた。両者の真の対立点はおそらくそこにある。すなわち、成熟と未熟、老年と青年。この「論争」は、問題をブルターニュの枠内にとどめるのではなく、より普遍化した方が分かりやすいのかもしれない。

2. *Le Cahier Art-Mène*, n° 4 « Pierre Jakez Hélias », 1990

ロリアンで出版されていた雑誌のエリアス特集号。なぜこの特集が組まれることになったのか詳しい経緯は不明である。内容は I. 作家の人となり、II. ブルターニュは源泉、III. 口承性と演劇、IV. 対話、という四部構成で、最後の「対話」はエリアスへのインタビューである。IIとIIIにはエリアス自身による文章も収録されている。前者はユージェーヌ・ギュヴィック Eugène Guillevic の詩をブルトン語に訳すにあたってのノート。後者は1949年に執筆され、エコール・ノルマルで作者自身の演出で上演された「クレマン・マロへの書簡」*Epître à Clément Marot*と題された朗唱劇である。

なかでも読み応えのあるのは最後のインタビューで、後出の『スコール・ブレイス』*Skol Vreizh* のそれと併せて読むといっそう興味深いかもしれない。

4 *Ibid.*, p.93.

5 *Ibid.*, p.80.

6 *Ibid.*, p.84.

少なくとも内容的には大きく重複するところはない。エリアスはラジオやテレビの出演も多く、特に『誇り高き馬』の成功以来、全国的な新聞や雑誌でも多くのインタビューを受けたが、この2つのインタビューは出色である。以下、特に興味深い発言を要約して並べてみよう。

「私は口承文化を、見事に話すが決して文字を書かない人々を出自とする人間である。文字を書く人間は私が家族で最初だ。私にものを書くきっかけを与えた本は一冊もない⁷」。

「私は人を教化しようとしたことなど一度もない。ブルターニュを誉めそやすのは私の仕事ではない。私の仕事は書くことだ⁸」。

「私は学校で教えられるブルトン語のせいで本当のブルトン語が貧しくなるのではないかと危惧している。教えられるブルトン語は本当のブルトン語ではないし、ブルトン語の昔からの魂を文章化することは決してできない。昔使われていたブルトン語は日常生活と関係があり、民衆が血肉化する形而上学があった⁹」。

「この農民文明の不幸は、人が気にするのが遅すぎたことだ。その消滅はずっと前から続いており、その危機は実際もはや取り返しのつかないものとなっている。ブルターニュ文化は「農民」の文化だと考えられているが、これはほぼ事実だと思う。忘れてはならないのは、「農民」文化は貴族文化をその出自とするということだ¹⁰」。

「言語の擁護はなかった。消滅は取り返しがつかない。ブルターニュ公で言語を擁護した人は誰もいないし、ブルトン語で書かれた独立諸公の公文書などどこにもない¹¹」。

「マックス・ジャコブのせいで私が詩に関して抱いていた考えはどこか変わってしまった。私がシュールレアリスト的傾向の演劇に向かったのも、たぶん

7 *Le Cahier Art-Mène*, n° 4 « Pierre Jakez Hélias », 1990, p.32

8 *Ibid.*, p.33.

9 *Ibid.*

10 *Ibid.*, pp.33-34.

11 *Ibid.*, p.34.

彼の影響によるものだと思う¹²」。

「私は大衆に受けるようにするというのが嫌いだ。未知のものに既知のものを貼り付けるというのが。ひとりの画家ではなくたくさんの画家がいるように、たとえある作品がどんなに偉大だと考えられていても、芸術におけるあまたの可能なやり方を覆い隠す作品などは存在しない。毎回選択があり、何かを犠牲にする¹³」。

「私はいつもブルトン語で考えている。ブルトン語を使うというのは、私の登場人物たちに輪郭を与えるために一番いい方法なのだ。というのは、彼らの声のイントネーションがどんなものなのかとか、何を話すのかということを間近に想像しなければならないからだ。私は戯曲をいったんブルトン語で書いてからフランス語に直す¹⁴」。

「地域主義的でない作家などいるのか？ 自分が住んでいる地域や場所について、心を込めて語りたいと思わない作家などいるのか？ 私はパリの街中に住む良い作家や詩人を知っているが、彼らも自分の住む空間を意識する血の通った人間だ¹⁵」。

3. *Brud Nevez*, n° 172, Emgleo Breiz, 1994.

ピエール＝ジャケス・エリアスの生誕80年を記念して刊行されたプレストの出版社エムグレオ・ブレイスによるブルトン語の雑誌『ブリュット・ネヴェス』*Brud Nevez*の特集号。全116頁。巻末にこの作家のブルトン語の著作目録も掲載。巻頭にはエリアスの詩や散文が8篇。他の執筆者はユージェヌ・ギュヴィック Eugène Guillevic、フランシス・ファヴロー Francis Favereau、ファンシュ・モルヴァヌー Fañch Morvannou、ファンシュ・ブルディック Fañch Broudigなどそうそうたる顔ぶれが並ぶ。ギュヴィックは詩を寄稿し、エリアス本人がブルトン語に訳している。ファヴローの論考 « Helias, Mestr an istor-

12 *Ibid.*, p.35.

13 *Ibid.*

14 *Ibid.*, p.36.

15 *Ibid.*, p.37.

buhez » は、冒頭の研究書一覧の5)に掲げた『スコール・ブレイス』の特集号にフランス語版が掲載されている。モルヴァヌーの論考をはじめとして、特集されている作家と内容的に直接関係がない論考も目に付く。あるいはエリアス自身による巻頭の文章が目玉かと思われる編集である。

4. Anne-Denes Martin, *Itinéraire poétique en Bretagne : De Tristan Corbière à Xavier Grall*, L'Harmattan, 1995.

「トリスタン・コルビエールからグザヴィエ・グラールまで」という副題の通り、ブルターニュと関係のある10人の詩人を論じたもの。エリアスに割かれている頁数は8頁。同書で詩人一人に割かれている分量としては平均的である。もちろん論点は詩作品にある。

著者はまずエリアスの生涯、特に青年期を概観し、その作家としての使命が「それまで蔑視の対象であったブルトン語や農村世界を世間に認めさせることにあった¹⁶⁾」と規定する。そのうえでその詩の特徴を「ジャンル融合的」と形容し、しばしば対話的で譬え話やリフレインに富むその特徴を、民話や話し言葉に由来すると述べる。エリアスの詩の基本にあるのは生身の身体から発せられる声なのであり、彼にとって「詩は形式を身に纏うや、真の詩ではなくなるのだ¹⁷⁾」。

著者は言う。学生時代・教員時代を通じて、つねにブルトン語とフランス語の言語的二重生活を余儀なくされたエリアスの詩には、ときに＜言語＞と＜土地＞への権利要求が垣間見える。しかし彼の詩の真骨頂はそうした社会参加的な作品ではなく、＜正史＞が路傍に置き去りにした民衆、「ブルターニュの土地の貧しい騎士たち」を描いた詩にこそある。たとえば、「お馬鹿なジャン・マリー」 Jean-Marie la Bêtise、「間抜けのジャン」 Jean le Sot、「賢人マイ」 Maï la sage、「雌牛のラン＝マリア」 Lan-Maria des Vaches等々。そこに聖ユルルー、聖クレなどの聖人や、メルランやヴィヴィアンヌのような伝説

16 Anne-Denes Martin, *Itinéraire poétique en Bretagne*, 1995, p.226.

17 P-J.Hélias, *La Pierre noire*, Introduction, cité par Anne-Denes Martin, *ibid*, p.227.

の登場人物が加わり、エリアスの詩の背景をなす農村社会を構成する。詩のテーマはさらにモルヴァン・ルベスクMorvan Lebesqueやドリー・ペイントレスDolly Pentraethなどケルト世界の代理人にも及ぶ。

彼のフランス語の詩には、固有名詞や渾名を除きブルトン語は稀にしか登場しない。しかもその多くはフランス語に逐語訳される。明らかにブルトン語の直訳と思われる独特の比喻に富む表現も散見されるが、そのとき詩人は民族学者と重なる。

その詩の語彙とリズムからは、農村生活の掟が透けて見える。ブルターニュの現実への言及は、ときに単なるリアリズムを超え、読者を信仰と神秘の世界に誘う。土地とその住人の声に耳を傾けつつ、詩人は彼らのことを親身になって気にかける。エリアスにとって、過去とは傷つき、見捨てられた土地のそれ、消え去りつつある一個の文明のそれなのだ。

こうして著者は、このブルターニュの詩人における〈過去〉の二つの機能を指摘する。ひとつは、幼年期へと、地の塩へと向かう抒情詩人としての機能。いまひとつは民族学者という、証言者としての機能。にもかかわらず、後者の機能に関しては、必ずしもよく理解されているとは言えないと著者は言う。

エリアスにおいて、過去は「二度と帰らないもの」という色彩を帯びることはまずない。それは現在と重なり、未来に結びつく。時間が相互に干渉し合うこの世界において、過去は死と絡み合う。そこでは死は終わりではなく、再生への道筋なのだ。

エリアスのすべての作品は、舞台としてブルターニュの農民社会をもち、素材としてブルターニュの文化をもつ。詩においても、読者は彼の他ジャンルですでに馴染みの風景や人物にしか出会わない。1970年代、ブルターニュを農村社会に、農村社会を苦悩へと結びつける彼の一元的なブルターニュ観は批判的となったが、1994年の今日、この作家は尊敬され、詩集も再版されている。

最後に著者はこう疑問を呈する。自分の扱うテーマに習熟した民族学者は、詩人から純朴さを奪っているのではないか？

5. Charlez ar Gall, Jean-René Le Quéau (et alia), *Per-Jakez Hélias, Skol Vreizh*, n° 36, 1997.

毎号ブルターニュ文化に関する興味深い特集を組む季刊『スコール・ブレイス』のエリアス特集号。当初は生誕80年記念号として企画されたが、残念ながら編集が遅れて没後の出版となった。その裏事情については、冒頭のシャルレス・アル・ガル（シャルル・ルガルCharles Le Gall）による追想文に詳しい。なおアル・ガルはブルトン語ラジオ放送におけるエリアスの後継者。内容としてはイヴォンヌ・コースYvonne Cozによる年譜が、エリアスの著作の網羅的な書誌情報を含んで大変に貴重である。他に本人へのインタビュー、ロナン・カルヴェスRonan Calvezによるブルトン語ラジオ放送に関する論考などがあり、またフランシス・ファヴローが一人で3篇の論考を寄稿している。このシリーズではいつものことだが、写真、図版等も豊富である。使用言語はフランス語かブルトン語のいずれか、あるいはページの左右を利用しての二言語併記の論考もある。

フランシス・ファヴローによる論考「私が（少し）知っているピエール＝ジャクス・エリアス」は、1948年生まれでいわゆる68年世代である著者の視点が窺えて興味深い。ファヴローは10代のときにこの作家の演劇から受けた衝撃を率直に語る一方で、のちに『誇り高き馬』として纏められる『ウエスト＝フランス』に連載されたブルトン語によるコラムは、五月革命の最中には過去を振り返るばかりの「懐古趣味」にしか見えなかったと告白する（もちろん、その後意見を変えたが）。身近で見たに関しては、私心なく人と付き合い、人を惹きつける生得の才能があったとし、自分自身に対する意見もどんどん口にするよう促してくれる稀有な気質の持ち主だったから、きっとその著作を皆が批評・研究するのを喜んでくれるだろうと語っている。

同じ著者の「ピエール＝ジャクス・エリアスにおけるブルトン語話者に関する言説の変遷」は、第二次大戦前からこの作家のブルトン語との関わりを概観する。古くは『ヴァン・ドゥエスト』や『アル・ファルス』に掲載された言説から、『誇り高き馬』の「新約聖書」がもたらした反響を経て『記憶を

乞う人』へと向かう道筋、さらにプロゴフの反乱への共感に至ってこの作家の根源的な急進性にまで話が及ぶ。

F. ファヴローによる論考はもう一篇「生活史の達人、ピエール＝ジャケス・エリアス」がブルトン語とフランス語のバイリンガルで掲載されている。すでに指摘したように、ブルトン語版は『ブリュット・ネヴェス』の特集号に収録されたものと同一である。著者は『誇り高き馬』の成功がきっかけとなって、フランスは「生活史」*histoire de vie*というジャンルの流行を見たとし、その特性を考察する。エリアスが秀でているのは、まるで打ち明け話をするような親密な口調においてであり、そこでは著者が消え去り、民衆の声が記憶を語り出すのだと述べる。

しかしこの特集号で最も興味深いのは、なんと言っても13頁に及ぶエリアスへのインタビューであろう。1993年にF. ファヴロー、J.R. ルケオー Le Quéau、M. ルロワ Le Roy、P.Y. マルザン Marzinによってカンパールで収録されたこのインタビューは、エリアスの闊達な語り口が再現されてなかなか読み応えがある。以下、特に興味深い発言を要約的に引用しよう。

「『黄金の草』という小説のタイトルについては、私がラジオを始めた当時、ブルトン語の話者たちにはコンプレックスがあって、中学も出ていないその人たちに、彼らが私の知らない多くのことを知っているということを理解してもらうのが大変だった。そんな彼らが顔を上げて歩いて欲しいと思ったので、著書のタイトルには彼らを誉めそやすようなものが多い。草はつましいが、黄金だということだ¹⁸」。

「私はシュールレアリストだったが、何者かであることに長続きしない性分で、何者かであることに飽きるとまた先に行く。初期のシュールレアリストは、日常のありふれたものから出発してその先に行く人たちだった。コントにもグウェルスにも、シュールレアリスト的な要素は珍しくなかった。かの有名な空飛ぶ絨毯とか。自動書記もシュールレアリスト的な実践だが、私は長いあいだそれをやってきた。祖父などは、自動口述をやっていたわけだし。彼

18 Charlez ar Gall, Jean-René Le Quéau (et alia). *Per-Jakez Hélias, Skol Vreizh*, n° 36, 1997, P.27.

は何について話すのかも分からないままに話し始めて、祖母に「お前のお祖父さんは自分が何を話すつもりなのか知らないんだよ」って言われていた¹⁹。『私は反逆の順応主義者だ。私は公衆の面前で、顎鬚や長髪を振り乱して荒れ狂ってみせることはできない。私は内面では革命的だが、マージナルで、つねに何かの周縁にいる人間だ。目に見える行為者ではないと言ってもいい。目に見える反逆は若者のものだ、最も重要な反逆者は姿を現さない。社会学者や哲学者は物静かな人々だ²⁰』。

「私は詩人のグラールやケネックとしばしば対立させられるが、似たところがある。『横倒しにされた馬』は好きな本だが、きちんと読んだ人はほとんどいないのではないか。グラールのことは死ぬまでよく知っていたし、非常に興味深い私信も持っている。彼だけが、想像的ブルターニュに対する、絶対的にユートピア的な賞賛を持続けた。『誇り高き馬』の終わりで私はブルトン語は消え去る運命だと書いたが、それが彼の気に食わなかった。あの人はいつもタリエシンやヒヤワッヘンのことを考えるのだ²¹」。

「私は言葉が好きだ。なかでも話し言葉が好きだ。言葉の立てる雑音が好きだ。言葉の響きや高さや激しさ、つまり言葉の音楽が好きなんだ。Sod gant ar brezoneg! (ブルトン語が大好きなんだ)」

「私はずっと自分の国にいて、一度も離れたことがない。80年間ここにいる勘定になるが、いまや私の国の方の方が私から離れていつている。私は自分自身の国から完全に見捨てられている」。

「私が演劇や詩に関心をもつのは、ただ単にそれがオーラルのジャンルだからだ。詩はオーラルだ」。

「『誇り高き馬』はもともと本ではなかった。カンパールのエコール・ノルマルで作文の添削や授業をした後に新聞のために書いた短い記事を、150から160本くらいをまとめて本にしたのだ。『ウエスト＝フランス』や『ブルターニュ・ア・パリ』が記事を書けと言ってきたとき、本業の教師業が忙しかつ

¹⁹ *Ibid.*, p.28.

²⁰ *Ibid.*, p.29.

²¹ *Ibid.*, p.29.

たためアクチュアルなものには係われなかったので、自分が生まれ育った文化をできるだけ正確に書きたいと提案したのだ。私はブルトン語のコラムのテキストを尊重したので、『誇り高き馬』はまずブルトン語で書かれ、それからフランス語に訳されたのだ²²」。

「私の幼年時代が不幸であったと思い込むのは誤りだろう。私たちは貧しかったが、悲惨ではなかった。私はその生活の厳しさを『誇り高き馬』の「人生は厳しい」という章のなかで描いた。時間はなかったが、私はブルトン語がこの言語を話す人、この言語を生きる人の人生全体にどのような影響を与えるのかということについて一冊の本を書きたかったのだ。ブルトン語教育についてではない。私は学校がこの言語を守ることができるか確信はない。ブルトン語の学校の周囲にブルトン語を話す環境を作らなければならないし、それは非常に難しいことだ。学校以外ではどこに行ってもフランス語という状況では難しいのだ。私だって寂しくなって、シャルル・ルガルと30分もブルトン語で電話で話し込んでしまうことがある。これは本当に問題だが、どうすればいいのかは私にも分からない²³」。

「こんなことを言っても仕方がないが、初めは『誇り高き馬』がこんなに評判になるなんて考えてもみなかった。好きな作品ではなかったのだ。私のお気に入りには次の『人のものと自分のもの』 *Les autres et les miens*だ²⁴」。

6. Pascal Rannou. *Inventaire d'un héritage. Essai sur l'œuvre littéraire de Pierre-Jakez Hélias*. Le Relecq-Kerhuon : An Here, 1997.

出版当時、第二の『横倒しにされた馬』と呼ばれて物議を醸した評論。しかし筆者の齒に衣着せぬ語り口以外は、内容的に至って真摯なもので、エリアスのすべての作品を読み込んだ上で従来の評価に捉われない闊達な批評を展開している。その点で作品論が抜け落ちていた『横倒しにされた馬』とは根本的に違う。

²² *Ibid.*, pp.32-34.

²³ *Ibid.*, pp.34-36.

²⁴ *Ibid.*, p.37.

多方面で活躍したエリアスを、劇作家、小説家、詩人、コラムニストに分け、各々に一章ずつを割く。著者はそのなかで劇作家、詩人としての側面を高く評価し、小説家としては玉石混淆、生前最も評価の高かったコラムニストに対しては最も低い評価を与えている。以下、各章を簡単に要約しよう。

劇作家としては、エリアスは早くからその使命を自覚した。少年時代にパリで演劇の世界に惹かれ、戦前のレンヌでコンセルヴァトワールの演劇の授業を聴講。1942年にはプルドゥルジックで巡業中のジャン・ヴィラルールJean Vilarと出会い、48年にコルヌアイユ祭を始めると、すぐに演劇をプログラムの一部とした。ラジオの脚本については言うまでもない。1977年にガリレー社から出版された劇作品集は各350頁の2巻本で、上巻には田舎暮らしに想を得た『グラン・ヴァレ』 *Le Grand Valet* や『トラクター』 *Le Tracteur*³、下巻には神話に想を汲む『カド王』 *Le Roi Kado* や『グラドロンの遊戯』 *Le Jeu de Gradlon* や『第二のイズー』 *Yseult Seconde* が収録された。メーテルランク風ありロルカ風ありテネシー・ウィリアムズ風ありと多彩な作風のその劇作品は、当時のブルターニュという特定の時代や場所に還元できない普遍性を持つ、と著者は高く評価する。

一方、小説家としての活動に関しては、これだけ出来不出来の多い小説家は珍しいとしながらも、著者は『孤独の丘』 *La Colline des Solitudes*、『大騒ぎ』 *Le Diable à Quatre* を駄作とし、『黄金の草』 *L'Herbe d'Or*、『太陽風』 *Vent de Soleil* を評価して、『奇妙な夜』 *La Nuit Singulière* をその中間に置く。5作の共通点として「エリート的な強迫観念」を挙げ、その主人公が国際金融界の大立者、高名な外科医、元エンジニアなど社会的地位の高い人物であると指摘。そこに貧農の出身でありながら社会的上昇を果たした作者の自己投影を見る。

著者によれば、この作家の小説における成功作の特徴として、作中でのブルトン語からの借用の多さと、舞台が作者に縁がある土地である点が挙げられるという。いまひとつの特徴は、民話や劇作品と類似していることである。

同じ作家の詩作品についても、著者はきわめて高い評価を与える。詩の内

容はアイデンティティの要求と過去の称揚が大半を占めるが、散文では「過去追慕者」として批判されるその姿勢は、詩では気にならない。なによりも彼の詩の感情への訴えかけの強さのためであるが、教会やハリエニシダなど、ブルターニュにありがちなフォークロア的な要素があまり見られないのも理由のひとつであろう。著者はまた頓呼法による多声性の実現を評価する。アイデンティティは、たとえば下層民への言及によって、また古語法やブルトン語法への回帰によって可視化される。彼の詩は苦悩に満ち、外界の想起はすぐに内面の苦しみを反映する。そこにはパスカル的な気配すら漂う。それは、おそらくエリアスの詩を読んだことがないグラールが批判した「保守主義」とも「確信」とも無縁である。しかし詩人は不安であることに満足するわけではなく、それを打破する道も模索する。

まずアンガージュマンにおいては、彼は批判者たちに詩の形で応える。それは構造主義者であったりエムザオの代表者であったりするが、具体的な名前は明かされない。アンガージュマンは論争的であるばかりか、「私はブルトン語話者である」*Bretonnant que je suis*という宣言の形を取ることもある。そこにはまたナンセンスの要素もある。まさに昔ながらの逸話もあれば、自己への回帰もある。独我論的逸話もあれば、他者への呼びかけもあり、世界旅行によって獲得される相対的な視点というテーマや、中国、ケベックの風景も。

しかし彼の詩は知識人の関心を惹く要素には乏しい。それは豪快な滑稽さや見慣れぬ統辞法や混血を恐れない。登場人物も貧民で舞台も流行とは無縁の僻村であったりする。この詩人はその詩が物語的になったり演劇的になったり討論的になったり、さらには寓意的になることすら恐れないのである。

しかしながら、このような劇作家や詩人としての活動に与えられる高評価とは裏腹に、コラムニストとしてのエリアスが論じられる最終章は、「顕揚される過去、正当化される自己」という批判的な副題が付され、しかも全章中最も頁数が少ない。

著者ラヌーはエリアスのこの分野における仕事を概観した後、主著『誇り

高き馬』についてこう切り出す。この作品はひたすら日常生活の描写に終始し、読者を退屈させる。しかもブルトン語からの借用が数多くある。それは詩におけるよりも顕著で、むしろ混血文学の系譜に属すると言える。ブルトン語はときに、場所の名前や人の名前でそのまま登場する。けれどもその多くはフランス語に訳される。そして仏訳の後ろにイタリックかカッコ付きでブルトン語の原語が入るのだ。逆に仏訳が後になることもある。ブルトン語特有の言い回しも数多く登場する。エリアスは言葉遊びを繰り返しながら、他方でその言語能力に応じて読者を選別してもみせるのだ。

コラムニストとしてのエリアスを論じた章の最後は、『横倒しにされた馬』に依拠しつつ、この作家に対する批判的な読解に割かれる。が、それはグラールの主張を追認することではない。それどころか、著者はその主張の大半に異議を唱える。たとえば「ピエール＝ジャケス・エリアスはビグーデン地方についてしか語らなかった」という批判には、「古えより数十のブルターニュはあれど、ひとつのブルターニュはなく、エリアスは自分のブルターニュ以外のことを語ることはできなかった²⁵」と反論する。また『誇り高き馬』のブームは、大地への回帰を志向する新ブルジョワジーの台頭を象徴するという見解については、今日から見ればアナクロニズムにすぎず、エリアスのような非宗教的左翼の人物に対する批評としては不適切であるとする。確かにこの作家の振る舞いは、ブルターニュの運動家やナショナリストの期待を裏切ったかもしれない。しかしブルターニュ運動の大義に共感を示そうが示すまいが、それは彼の自由である。当時はブルターニュの農民でさえ自分たちの言葉に屈辱を覚えこそすれ、それを擁護しようとは思わなかったのであり、知識人の運動が高揚するのは1970年代のことにすぎないのである。しかもグラールがブルターニュは歴史的・文化的にナショナルな実体があったと主張したところで、ブルターニュではナショナリズム運動は盛り上がりせず、むしろ地域アイデンティティの強化という方向に向かった。グラールがエリアス

25 Pascal Rannou. *Inventory d'un héritage. Essai sur l'œuvre littéraire de Pierre-Jakez Hélias*, Le Relecq-Kerhuon, An Here, 1997, p.111.

の「フォークロア」に対する執着に抱く軽蔑も、終戦直後にこの語が担っていた優位性を知らないからだ。

そもそも彼は『誇り高き馬』はもちろん、エリアスの他の著作をまともに読んだことがあるのだろうか？ 『誇り高き馬』はせいぜい目次に目を走らせた程度ではないか？、書かれたものから判断する限り、彼が参照した資料はせいぜい雑誌のインタビュー記事かテレビやラジオのインタビュー番組でしかない。

にもかかわらず、著者は次の点では完全にグラールに同意する。それはエリアスが公立学校のブルトン語収奪への責任を認めるにもかかわらず、そのことにいささかも抵抗の意思を示さないことである。彼は「学校でブルトン語で話すことは禁じられている。すぐにフランス語を話さなければならないのだ。何という悲惨²⁶」と書きながら、もう一方で「教育は親から子へ伝えられない唯一の財産だ。共和国はそれを万人に与える²⁷」と書く。しかし言語を伝えることも教育であることに彼は気づかない。ブルトン人もそれに気づかないが、それは学校から自らの言葉に対する憎悪や軽視を吹き込まれているからだ。しかし、文字の習得は二言語でなされ得たかもしれないのだ。にもかかわらずこの人は、片方の言語を捨てることに無条件に賛成している。「フランス語をしっかりと覚えることは、子供たちに女中以上の境遇を約束するだろう²⁸」。彼はブルトン語を使用して社会的に成功することがあり得るということに気づかない。「言語にはヒエラルキーがあり、ブルトン語は最下位かもしれないという思いに捉われはしたが、それを考えるのはまだ時期尚早だった²⁹」と書いてはいるが、それを考える機会はついに訪れなかったのだろうか？

エリアスは彼自身が自らの言語を奪われて苦しんでいるのに、それが教育や現代生活にとって必要な痛みだと思い込んでいる。伝統社会とともにブル

26 P-J. Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, Plon, 1975, p.206.

27 *Ibid.*, p.192.

28 *Ibid.*, p.284.

29 P-J. Hélias, *Le Quêteur de mémoire*, Plon, 1990, p.46.

トン語も消え去るべきだというこの運命論に、グラールが注意を促すのは正しい。それは、運動家たちを「民衆から支持されてもいないくせに民衆を代表するような顔をしていた³⁰」としてまとめてマイノリティーに放り込んだエリアスを苛立たせたのだろうか？ いや、民衆が運動家を支持しなかったのは、彼らがまず言語への軽蔑を教えられたからではないのか？ しかも、一方でエリアスは「時代はまだ言語闘争が若者を捉え、政治家を動かすまでにはなっていないかった」と運動家の功績を認めてさえいるのだ。問題は彼がこの闘争に参加しなかったということなのである。

「ブルトン語ラジオ放送のおかげでコンプレックスがなくなった。それが私の狙いだった³¹」と彼は言う。その一方でこの人はフランス語を教えてブルトン語の駆逐を助けた。教師として生涯ジュール・フェリーのジャコバン・イデオロギーに手を貸していたのだ。このジキル・ハイドの行為を彼はあっさりとやってのける。「誇り高き馬」などという平凡なタイトルの裏に、いかなる尊厳の擁護を感じればいいのか？ 彼はまた「私は派閥や教会には注意深く距離を置いた」と自画自賛するが、これは事実ではない。正字法の選択において、彼はブレスト大学でしか通用しない「大学」正字法を採用し、ファルファン参事会員chanoine Falc'hunやブレストのケルト学者の派閥を支持した。政治的には社会党で、死ぬ直前の大統領選挙のときはジョスパンを支持していた。そもそもそれほどブルトン語を重要だと思っているなら、なぜ自分の子供たちに教えなかったのか？ 彼らはブルトン語ができないではないか。

しかしエリアスとグラールのあいだには共通点も少なくない。二人が根本的に異なっていたのは、歴史の流れに従うか逆らうか、というその姿勢においてであった。エリアスは自分を育んでくれた学校教育に逆らうことはできなかったのである。

著者は最後に、エリアスのプロフィールに関するひとつの秘話を公開して

30 *Ibid.*, p.295.

31 *Ibid.*, p.152.

みせる。彼のプロフィールにはいつも「アグレジェ」と書かれているが、実はこれは正式な試験を経て手に入れた称号ではない。60歳を過ぎて年功を評価されて手に入れた称号なのである。にもかかわらず、彼はそれをあたかも通常的手段で得たような振りをする。1974年の官報を見れば、この人がその年「現代文学」のアグレジェに任命されたことが分かる。つまり著作のプロフィールでお馴染の「古典文学」のアグレジェではないのである。これはギリシャ・ラテンの専門家としてはあまり名誉なことではない。しかもこの事実は彼自身やその家族が編集に携わった『スコール・ブレイス』の特集号においてさえ触れられてはいない。これは明らかに意図的な事実の歪曲である。

しかもこの彼の選択のせいで若者が一人職にあぶれるのだ。アグレジェの試験で争われるポストの9分の1が外回りのポストに与えられ、それを得るためには申請する必要がある。申請しなければ、それは若い人かさらに年上の人に与えられる。つまり60歳でアグレジェになるのはポストをひとつ潰すに等しい。そうなるのは、必ずしも教師としての才覚や教育への貢献度からではなく、視察官や校長からの覚えが目出たかったということの意味しているのである。こうしてエリアスはいよいよ学校制度と持ちつ持たれつ関係になってしまうのだ。

この人は「ブルターニュの民族浄化」と自分ではけっして呼ばなかったものの、慎みのベールを被せるのだ。彼は教師としての仕事とブルトン語放送の司会やアル・ファルス議長としての仕事を混同することはない。このブルトン人作家が、一度でもブルトン語擁護運動に手を貸したことがあったろうか？ 彼はブルトン語の存続のために払った代償よりも、得たものの方が大きいのだ。

その点で、エリアスは自らの意思にかかわらず過去追慕者だった。なぜならブルトン語が存続するのを想像できなかったのだから。彼はひとつの文化の死に同意してしまったのである。馬の「誇り」はどこにあるのか？ その作品は宿命的な喪失の論理に貫かれている。詩ならそれもいいだろう。しか

し散文では若い世代に宿命論やあきらめを吹き込みかねない。たぶん彼の作品のなかで残るのは、名高い『誇り高き馬』ではなく、むしろ詩や演劇や小説の方だろう。

以上がラスーの主張の大筋である。その個々の見解の妥当性に対しては、おそらく意見が分かれよう。なによりもエリアスにおいて顕著であったさまざまな矛盾が、フランス社会全体という視点から捉えられておらず、あくまでも個人的な問題とされているのは、簡単に納得することはできない。とはいえ、このような研究の登場は、少なくともエリアスが単なる郷土の誇りという崇拜の対象ではなく、一作家として客観的に論じられる存在になってきたことを示していると言えるだろう。その点で、この書物は従来の慣習に捉われない新しいエリアス研究の出発を告げているかもしれない。

ちなみに巻末に付された「書誌」は、著者の本音が満載で楽しい。そこには、この本の元原稿が『スクール・ブレイス』のエリアス特集号に掲載するつもりで書かれたものの、「聖人伝」を目指す編集部の意向で没になった経緯がさりげなく綴られている。著者はまた同誌に掲載されたF. ファヴローの論文について「彼とは古い友達だが、こんなに文章がごてごてしては読者にメッセージが伝わらない」と苦言を呈する。この意見に賛同する人は多いだろう。

(つづく)

付記

本稿は平成23年度科学研究費補助金、(基盤研究 (C)) による研究「ピエール＝ジャクス・エリアスと20世紀ブルターニュの諸相」(課題番号22520321) の成果の一部である。